医療ジャーナリスト
村上紀美子

第9回

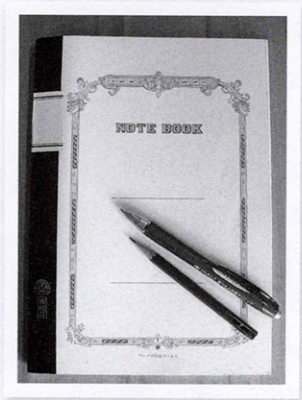
父と息子と母と
「家族で話し合ってください」とは言うものの

意思決定支援やACP（アドバンス・ケア・プランニング）が推奨されています。厚生労働省の調査では「人生の最終段階における医療・療養についてこれまでに家族等や医療介護関係者と話し合ったことがある」のは39.5%で，55.1%は「話し合ったことはない」。その理由は「話し合うきっかけがなかったから」が56%，「話し合う必要性を感じないから」が27.4%だそうです[1)]。

臨床現場で出会う患者さんや家族の半数は「話し合っていない」と想定したほうがよさそうですね。そういう時の参考に「父とほとんど話はしなかった」という松田さんに伺いました。父の七回忌に思い出す，複雑な胸中です。

＊

松田さんは医師で，急性期病院や緩和ケアや在宅医療でたくさんの看取りを経験しています。「患者さんやその家族には“家族で話し合ってください”なんて言うんですが，息子としてはそうはいかない。子どものころから50年間話してこなかった父と息子の関係性があるので。突っ込んだ話をしていたかというと，していないです」



写真：人生の終わりの日々の光景
息子が渡したボールペンや鉛筆で，父は口には出さない思いをつづった

仕事一筋だった父は79歳の時すい臓がんになり，外来での抗がん剤治療を3年半ほど続けていました。「僕は医者なので，予後予測が分かり死期が見える。だから一番ダメージを受けたのは，父が死んだ時よりも，その3か月ほど前に増悪を知った時でした」。主治医からの電話で知らされた日，松田さんはショックのあまり「生まれて初めて食事が食べられなかった」。これも誰にも言ってないそうです」。

症状コントロールと治療方針決定のために2〜3週間入院し，抗がん剤の適応がなくなり胸水がたまり……病状は予測通り進みました。死が近いことは，父には話しませんでした。でも「下の世話を息子にさせるようになったら，おれも終わりだ」と言い出し，松田さんは「ああ，分かっているんだな」と思ったそうです。

最期をどこで迎えるか。それも父には聞かずに松田さんが「自宅で」と決めました。寝ついて苦しかった時期は2か月ほど。訪問診療・訪問看護を緊急や臨時で呼ぶこともなく，定時の訪問看護師が来ている時に息を引き取りました。83歳。母はいつも「あんな最期の迎え方，理想的よね」と言っています。

会社勤め第一で家族を顧みなかった父と母の関係性はあまり順調ではないように，息子には見えました。しかし実際には，父の入院中，母は毎日病院に行き，自宅に戻ってからも献身的に看病しました。「なんだろうかと思いますね。妻としての義務・責任感でしょうか」と松田さん。そして父も最期の日々，遺す妻を心配して，息子に「母の面倒をしっかり見るように」と繰り返しました。夫婦の仲は子どもにもわからないものですね。

遺品を整理する中で，父が書き遺した日記のような大学ノートが見つかりました。七回忌を前に改めて読むと，会社勤めの苦労や家族への思い，口には出さなかったたくさんの思いが遺されていました。「僕の働きすぎや体調の心配がよく出てくるんですが，僕には全く伝わっていなかった……」。

＊

一番大事なことは照れくさくて話せない（特に父と息子は）。家族内で人生の最終段階のことを話し合わない人が半数はいるのが現実です。言ってくれないとACPも意思決定支援も進めにくいですが，口には出せない複雑な心境があると想定して準備することが必要ですね。

参考文献

1）厚生労働省：人生の最終段階における医療に関する意識調査報告書．平成30年3月．2018.

0917-1355/18/紙：¥500/電子：¥750/論文/JCOPY